村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』論
―触覚のイメージと母親たち―

細見佳代
（文20-593　国語国文学専修　国文学コース）

【目次】

1. 作品概要
2. 研究の目的
3. 五感のイメージ
4. 東京と離島
5. 母親たち
6. キクとハシ
7. まとめ

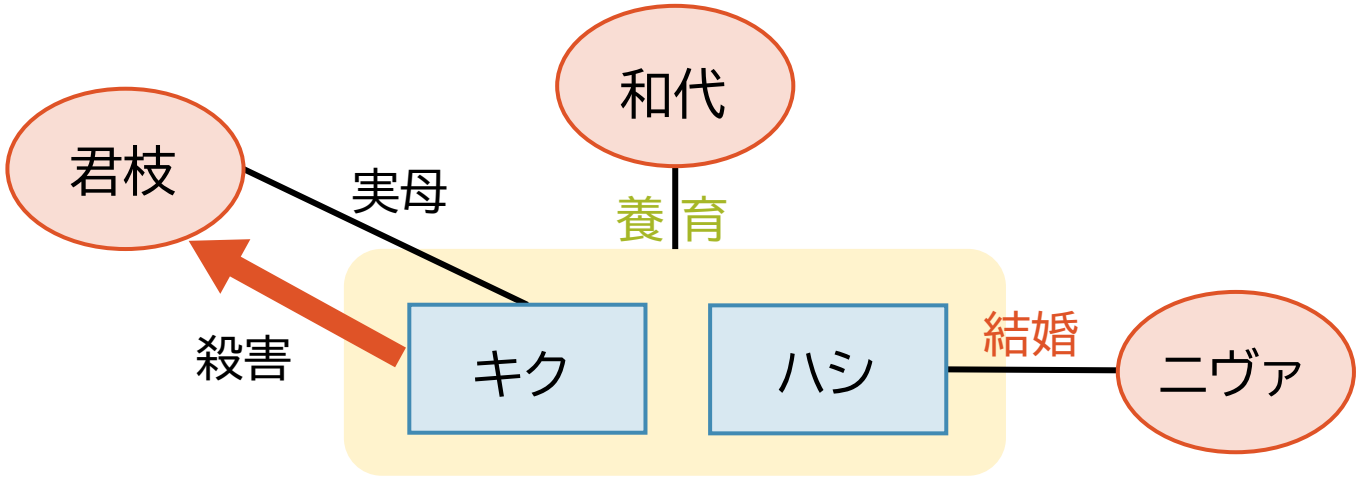
1. 作品概要

村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』
1980年10月に講談社より刊行された書き下ろしの長編小説

○あらすじ
キク（関口菊之）とハシ（溝内橋男）はコインロッカーに遺棄され、同じ乳児院で育った。小学校入学前に養子縁組が決まり、二人は西九州の離島に住む夫婦に双子の兄弟として引き取られる。
高校一年生の時、自分を捨てた母親を捜すため、ハシは家を飛び出して東京へ行ってしまう。ハシを追って養母の和代とキクも上京するが、東京で和代は命を落とす。
ハシが歌手デビューする一方、キクは深海に沈む神経兵器「ダチュラ」で東京を破壊しようと計画する。

2. 研究の目的

「母親の心臓の音」が生を表す重要なモチーフとして登場する
→登場人物の「母親」に注目（和代、君枝、ニヴァ）



★作品特有の表現や舞台設定が「母親の心臓音」や「ダチュラによる破壊」という結末へどのように影響を与えていくか分析
★物語に登場する「母親」の描かれ方にも着目しながら、作品のテーマやキクとハシの関係性に新たな考察を加える

3. 五感のイメージ

○触覚的イメージ

この作品では視覚・聴覚が触覚的なイメージに移行し、やがて体の内側・内臓へと意識が向かっていく

☆この「遡る」現象は作品のモチーフである「生」と「破壊」どちらにも結びついている

○コインロッカーの身体感覚

「囲む物」のイメージ→「繭」と「さなぎ」（東京を表す）

さなぎからの解放はコインロッカーで生き返った二人にのみ可能

4. 東京と離島

東京

○十三本の塔（東京の象徴）

○光

「フィラメントの一部」としてのハシ⇔本来のハシが持つ光に目を向けているニヴァ

離島

※キクとハシの
実質的な故郷

○海

心臓音、ダチュラと重なり合うよう描かれている

→母親の心臓音を響かせるために必要な「体液」の役割

薬島

共通の要素

廃墟

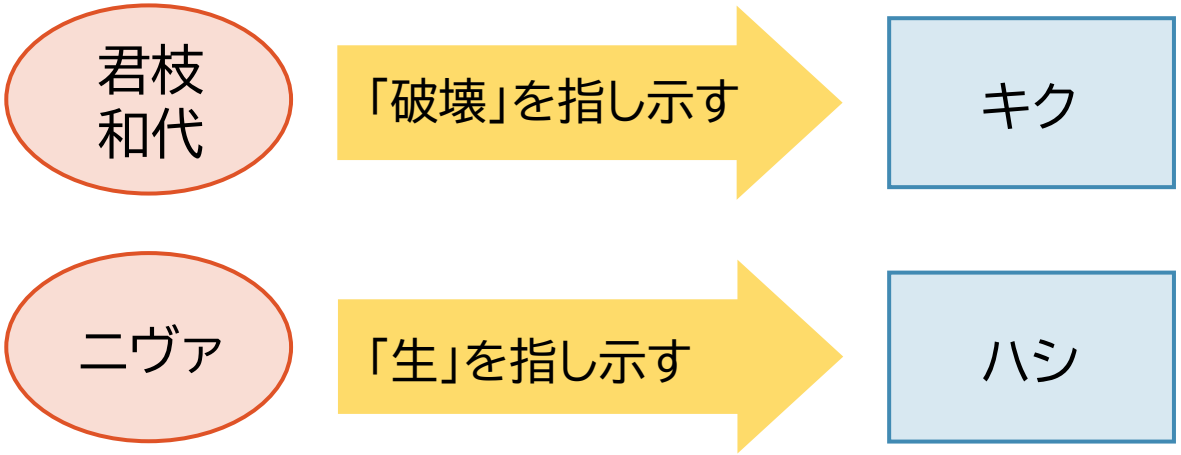
隔離された場所

キクが破壊によって
実現しようとする景色

5. 母親たち

○ニヴァの役割

登場人物の母親たちは作中で<u>触覚的な存在</u>として描かれている



終盤の「燃え続けて宝石になるのよ」というニヴァの言葉

→ハシに対する「歌い続けろ」というメッセージ=「生」の示唆

6. キクとハシ

○「新しい歌」の結末が意味するもの
キクの「破壊」によってハシは「新しい歌」を歌い出すことができた
→この作品で描かれているのは「生きるため」の「破壊」である

二人の才能…「身体能力」と「歌」（必要なのは生まれ持った身体のみ）
キクが君枝の死から教わった「一人になっても生きていけるすべて」
をラストシーンでハシも手に入れた

「母親の心臓の音」によってハシは自分を遡り、もう一度誕生する
→他人の評価に依存しない、一人の人間としての自立

★新たな「生」の解放

7. まとめ

★『コインロッカー・ベイビーズ』は作品全体で触覚的なイメージを重要なものとして描いており、このイメージが表す「遡る」現象は物語の主題である「生」と「破壊」どちらにも結びついている

→登場人物の母親たちは作中で触覚的な存在として描かれ、「生」と「破壊」を二人に指し示す役割を担っている

★ニヴァのメッセージとキクの破壊によって、ハシは結末で「新しい歌」を歌い出すことに成功した。この結末が意味するものは、それまで他者の評価に依存し続けていたハシの自立であり、それは彼にとって新たな「生」の解放である